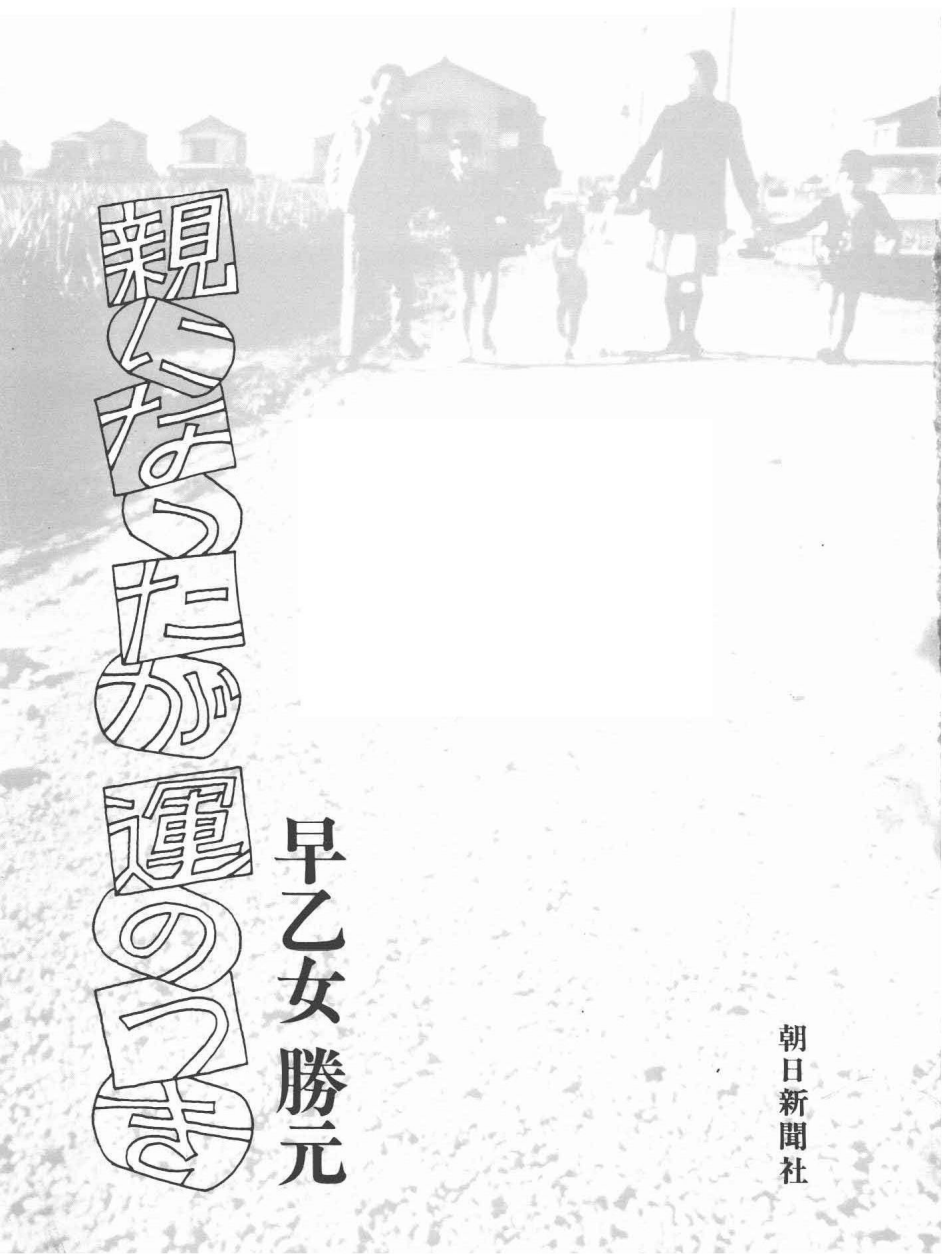


親になつたか  
運のつま

朝日新聞社

早乙女勝元

親  
に  
な  
っ  
た  
か  
ら  
運  
の  
つ  
ま



## 著 者 紹 介

早乙女勝元（さおとめ・かつもと）

作家、昭和七年東京下町の生まれ。高小卒で、  
下町の工場労働者として働きながら文学を志し、  
十八歳の処女作『下町の故郷』が直木賞候補、  
『美しい橋』『ハモニカ工場』『秘密』などが  
映画化された。これまで二十八冊を発表。

主な著書——

『早乙女勝元長編小説選集』全六巻（理論社）

『わが街角』全七巻（新潮社）——うち既刊四巻

『東京大空襲』（岩波新書）

『ベトナムのダーちゃん』『がんばれダーちゃん』（童心社）

『猫は生きている』（理論社）

『輝坊といっしょに』（新日本新書）

『共働きはラクじゃないよ』（草土文化社）

『やさしく強い子に』（民衆社）

親になったが運のつき

定価 860 円

昭和51年 5 月30日 第 1 刷発行

|     |                        |
|-----|------------------------|
| 著 者 | 早 乙 女 勝 元              |
| 発行者 | 朝日新聞社 角田秀雄             |
| 印刷所 | 図書印刷株式会社               |
| 発行所 | 朝日新聞社 東京・北九州<br>大阪・名古屋 |

親になったが運のつき  
目次

第一話 主婦ならぬ“主夫”は大忙し

第二話 愛車の値段は金百円なり

第三話 さわやかな声に誘われ京都市

第四話 輝の図工が1だなんて

第五話 鉄道枕木で作った新しい家へ

第六話 体重減って頭の痛い夏休み……

第七話 色白の少女がたずねてきた

第八話 子づれで彼女ヒコークに

第九話 輝のひとり旅に民の悪タレ

第十話 子どもは教師をえらべない

第十一話 ドロ民五右衛門の大活躍

第十二話 迷いこんできた小さなウサギ

第十三話 共働きはラクじゃないが……

142 131 120 109 98 87 76 65 53 42 31 19 7

第十四話 鼻水すすりあげて街頭へ

第十五話 ベトナムでダーちゃんと会う

第十六話 ヒョンが死んで民が一年生

第十七話 一家中みんな長がついて

第十八話 焼土に食物を探し求めた日々

第十九話 だれがバクダンおとしたの？

第二十話 廃油たれ流し犯人を追跡

第二十一話 エンジンがかからなかったら……

第二十二話 怪獣パンと冷や汗もののテレビ

第二十三話 戻ってきた小犬コロンボ

第二十四話 ランニング少年につづいて

あとがき

装丁

多田 進

写真

石川文洋

大北 寛

吉江雅祥

小島順司

親になつたが運のつき



## 第一話 主婦ならぬ“主夫”は大忙し

「じゃ、行ってくるわね」

といって、彼女が、フランスの郵便配達夫みたいな黒いズツクの鞆を肩に、そそくさと家を出ていくのが、七時三十五分。

「ふん」と、ぼくは、決まって鼻を鳴らす。

行つてらっしゃいといえは、こちらは家内になつてしまふ。そして、あちらは家外だ。つまり、普通の家庭と逆で、うかうかしてるとぼくは主婦ならず主夫にもなりかねない。だから、ふん、と鼻を鳴らすぐらいが、いかにも妥当なのである。もつとも、朝のひとときは、満足に口をきいていられないほどせわしないのだ。

多少のゆとりを見て、ほんの十分も早く起きたら、家の中をかけずりまわらなくてもすむのだが、おくさまもふくめて一同、予定の時間にデジタルが鳴りだしても一分でもふとんの中でがんばっているものだから、ギリギリに飛び起きたとたん“戦場”になつてしまふ。まず彼女が朝食の用意をととのえるうちに、ぼくが、まだいたずらざかりの娘を起こして、着せかえ、トイレに

行かせ、その横の二男をたたき起こせば、台所では、小学校三年生の長男が、ねぼけまなこで、フライパンをいじって、ジージーとかんたんないため物などしているという具合。彼女は、その材料だけ用意して、あとはさっさと消えてなくなる。

「さ、急いで急いで」

三人の子どもたちの食事をならべ、食べおわらせるまでのぼくは、トイレにかけこむゆとりもなく、朝っぱらからの総指揮で、大声をはりあげる。

「きゃッ！」

二男坊の悲鳴。

「なんだ、どうしたんだ？」

「おにイちゃんが、取ったの、ボクの。ほら、あんなに自分ばっかし」

「輝ッ、おまえは、なんだって、そうやって人のを侵略するんだ、このニクソンめ」

「だって、おれのほうが、身体でつけえ。なのに、民とおんなじなんてことあつかよ。不公平じゃんか」

「おとうが、ちゃんとみて、民主的にわけてあんだ。つべこべいうな」

「おれ、もつと食いたいよ。ニクソンでもいいよ」

「馬鹿モン。おとうはな、ベトナムの子どもたちのために儉約してカンパを送ってんだぞ」

かせつ、とばかりに、長男の皿からソーセージの一本をわしづかみにし、ブツと二つ折りにして、その小さいほうを、娘のお皿に投げ入れてやれば、

主婦ならぬ『主夫』は大忙し



「あれ、これっぽっちになっちゃった……」

と、民、不服そうにぶくつと口をとがらす。

「いいじゃないか。見ろ。おまえたちのかわいい妹のためなんだ。だいたい思いやりつてものがなくなったらな、人間おしまいだぞ。見ろ、妹を」

「コレ、アイチャンノ」

身体中どこもかしこも、まんまるくふくらんだ娘は、その出ばったおでこの下に黒光りした目をきよときよとさせて、みじかい両手でパンのかけらを持ち、さもさも大事そうに食べている。小リスが木の実でも食べているようなその格好を見ると、自分のがちよびり減った二男坊も、しかたなく納得した。二人の兄イたちは、この小さな妹が大好きなのである。妹からよく思われたら、その分だけ、自分たちが兄貴としてのカンロクを増すかのように、輝も民もさかんに張りあっている。

お兄イたちの首ったけの妹の名前は、愛。もうすぐ二歳。だんびろの顔に、おでこばかりぼくににてデコンとふくらんで、おしゃまで、歌が大好きで、いつも「マモメマモメ、マモノナカノトイハ……」を、口ずさんでいる。かごめが「マモメ」になり、おぼけだようが、「オカケダヨ」になってしまう。草葉保育園にかよっている。その上の二男坊は、民。好ききらいのはげしい寝小便たれの五歳。アイちゃんたちがう別の高砂保育園。

長男、輝。三年生。まっくろな顔で、笑うと栗がはじけたみたいになるが、意外にもうじうじ

型の慎重派で、学校ではなんともパツとしない。ウイリアム・テルと行かないまでも、彼がその名の通り輝いてくれさえすれば、三人あわせて「輝く人民の愛」となるのに、現実はどうもままならぬものである。

そして、彼女。直枝、三十四歳。東京下町の小学校の音楽教師。勤統十一年。妻というところ、さしみのツマ、あるいはツマヨージを連想させ、家内、女房も、どうもしっくりこないの、カノジョという。その彼女の夫、ぼく。年齢は四十一歳。四十八キロ。吹けば飛ぶようなスタミナで、それでも書いた。著書二十冊以上。目下五千枚に及ぶ自伝的大河小説『わが街角』を執筆中。

共働き生活で、三人の「小怪獣」をかかえ、家内＋主夫＋東京空襲を記録する会理事＋ベトナム人民を支援する下町文化の会会長＋作家のぼくは、まさに大忙しなのである。

夜になると、わが家の輝は、作家になることを志してかどうか、薄べったい一冊のノートに、かならず日記を書く。ひどく乱雑な、ばかでかい字だ。根が小心者のくせに、文字だけは、どうしてこんなに無神経なのかわからない。もちろん内容も。――

×月×日

きょうは、国語のべんきょうのため、やすみじかんにかんがえてました。それで、そとであそべなかったの、やだったでした。なんでかっとうとゆうと、べんきょうよりあそんだほうが、とてもおもしろいからです。だから、とてもやでした。

その国語のもんだいは、つまらないので、ぼくはきいてなかったから、できませんでした。これであつたらう。べんきょうで、そとへでられなかったことを。だからおしまい。ずるくないぞ。もうじかんなんだから、おしまい。ほんとだぞ。

×月×日

きょうは、けさ8じ、がつこうへいくとき、ものすごいこうずいでした。そして、きょうは、そのことをかきます。やだったことは、みずがすごいので、ながぐつにみずがはいるからでした。それから、みずがすごいかわからないけど、はやくかえしてくれたのがうれしかったです。

×月×日

きょうは、4じかんめにテストのこたえあわせをしました。はじめ、よかったけど、あとで15てんとかすくないのになりました。そして、はずかしかったときは、15てんと60てんをゆうのがはずかしいでした。じゃあな、またあおう。アハハハハハ……

「アハハハで終わってるな。黄金バットの笑い声みたいで、おもしろいじゃないか」

日記帳の何日分かをまとめて読みおえた後、ぼくはいった。

「笑ってる場合じゃないわよ」

彼女の声はねかえってくる。いやにしょんぼりとしたあわれっぽい語調だ。こたつにすわって、手元の何枚かの答案用紙を注意ぶかく見ていたが、ほっとため息を洩らしながら、

「どう、これ見てよ。あなたの子の成績をさ」

「ちょっと、できないときばかり、人のせいにしてやがって。ちょいとピアノでも鳴らそうもんなら、やっぱし、あたしの血スジだなんて、へっ、勝手なもんだよ」

ぼくは、皮肉たっぷりにいう。

「理くつはヌキにして、ごらんなさいよ。二万円もする『わかる算数』の道具使って教えてんのに、ちっともわかつちやいないんだから、やんなつちやう……」

ワラ半紙大の答案用紙を見る。今はやりのワーク・ブック・テストだ。なるほど、赤鉛筆の総点は15。横書きの早乙女輝の名前が、まのびして早乙女光軍と読める。問題は月の動きや時刻、方位の関係などらしく、月が上ってきた四枚の図を見ながらこたえるしくみだが、ぼくの目から見ても、ばかにしちめんどろくさくて、つまらない設問である。彼女は総点でため息をついたが、ぼくは問題の中身にがっかりする。

「こんなものは、そういつちやなんだが、十五点で結構だよ。大結構だ」

「じゃ、こっちは？」

もう一枚は、算数の問題と数字の書きかた。ぜんぜんできない。たとえば六万五千三百九を輝のやつは60050039と書いた。総点は、国語とおなじ十五点。十五点は一つきりかと思ったら、なんと二つあったわけだ。

「ふーん、なあるほど」

「そら、見なさい。アハハハなんていつてるときじゃないでしょ。こんなひどい点を取る子、そうめったにいやしないわよ。輝にきいたらさ、零点が一人、五点が一人、十点が一人いたから、

おれのあとには、まだ三人もいるんだっていばってるの。あきれてモノもいえやしない」

彼女は、ぶりぶりしている。不満げな口調である。音楽の専科とはいえ、教師だからやはり気になるのだろう。ひどい点だとあきれ顔だが、そういわれてみれば、輝の成績は、一年生に入った当座から、あまりにもよくなかった。「あゆみ」とかスマートな名の成績表は、いつ開いても、ほとんど2ばかりで3はちょろちょろ、5は一つもなく、どうひいき目に見てもできるほうではなさそうである。上、中、下と考えて、これで中ぐらいかときいたら、彼女はかぶりをふって、いや、とても中までいかない、下の部に入るといふ。それなら下の上かときいたら、下の中あたりだといった。以来、輝のあだ名は「下の中サン」とついたが、どうも教育上よろしくないとあって、これは取り下げにしてやった。しかし、十五点では、まさしく下の中であろう。いや、ひよっとすると、もうチョイ下かもしれない。

しかし、ぼくは、さほどおどろかない。

音大出のおくさまとちがつて、ぼくは小学校出。しかも、その当時の成績ときたら、たいてい六十一番か二番であつた。クラスは全部で六十三人いたから、ぼくは、お尻からかぞえて二番目ということになる。優は一つきりしかもらえなかった。あとはすべて、良と可。時には、その可の下の不可というのがくっついて、成績の基準が、優、良、可、不可と四種類になったかと思つたことがある。われながら、絶望的な成績だった。「見込みがない」と担任教師はあからさまにいった。いやに勇気のある教師である。なぜ、そんなに勉強ができなかったかといえ、暮らし向きが貧しく、教科書さえも満足にそろえることができなかったからである。